母子保健事業の評価における民間機関の技法に関する研究

中　村　安　秀*

要約：　戦後一貫して進められてきた母子保健サービス事業は、母子保健指標の改善に大きく寄与したと考えられている。しかし、住民のニーズは生活水準や住民意識に伴い変化しているが、基本となる母子保健サービスのシステムは不変である。現行の母子保健施策が変化しつづける家庭や環境に対応できているのか、現代の母子を取り巻く多様なニードに対応しきれているのか、単なる量的評価だけではなく、質的評価も重要視されなければならない。本研究では、民間機関の技法を導入することにより、母子保健事業の評価における質的評価や第三者評価を加味した評価技法モデルを提出することを目的とした。また、このような母子保健事業に関する評価技法の確立は、基本的母子保健サービスの市町村移管に際しても、必要不可欠であると考えられる。

本年度は評価技法のうち、社会学における質的分析法、フィールドワーク、マーケティングリサーチ法を概観し、母子保健事業の評価に対する応用可能性について検討した。

見出し語：母子保健事業、評価技法、質的分析法、フィールドワーク、住民ニーズ、マーケティングリサーチ

1．研究目的

戦後のわが国における乳幼児死亡率などをはじめとする母子保健指標の改善には著しいものがあり、発展途上国のみならず先進国からも注目を浴びている。

戦後一貫して進められてきた母子保健サービス事業は、このような母子保健指標の改善に大きく寄与したと考えられている。乳幼児死亡率の減少を第一目的にした各種の母子保健行政施策は昭和30－40年代にほぼ整備が完了した。その後、障害の早期発見早期治療、精神身体的発達の促進、そして現在は子育て支援というよう

＊ 東京都母子保健サービスセンター

に、時代の要請により行政施策のメインテーマは大きく変化してきた。

このように、住民のニーズは生活水準や住民意識に伴い変化しているが、基本となる母子保健サービスのシステムは不変である。現行の母子保健施策が変化しつづける家庭や環境に対応できているのか、科学的な疫学的評価に基づいた検討が早急に必要であると考えられる。

しかし、従来、行政が行なっている事業の評価は医師や保健婦などの事業に関わる者が行なう評価が多く、第三者が行なう客観的評価に乏しかった。また、現代の母子を取り巻く多様なニードに対応するためには、単なる量的評価だけではなく、質的評価も重要視されなければならない。

本研究では、民間機関の技法を導入することにより、従来行なわれてきた、あるいは今後新規に開始されるであろう母子保健事業の評価において、質的評価や第三者評価を加味した評価技法モデルを提出することを目的とした。

また、このような母子保健事業に関する評価技法の確立は、現在進められている基本的な母子保健サービスの市町村移管に際して、必要不可欠であると考えられる。

2．研究方法

従来、個別の母子保健プログラムに関する効果判定は行なわれてきたが、わが国の母子保健事業を統合した評価技法に関する研究は現在まで行なわれていない。従って、非常に基本的な部分から知見と経験を集積し、早急に具体的な方法論を確立する必要がある。

初年度は、従来行なわれてきた民間機関による評価技法の応用例を検討するとともに、社会学の最近の動向を文献的に考察した。

次年度は、欧米諸国や国際機関で多用されているマーケティング・リサーチ手法に焦点を絞り、社会状況や家庭構造も異なるわが国の母子保健においてどのような応用技法が可能であるのかを検討する予定である。

最終年度においては、実際のフィールド調査を行い、母子保健事業を統合した評価技法に関するモデル試案を作成したい。

3．研究成果

本年度は文献的考察を中心に研究を行なった。その内容を大きく、社会学における質的分析法、フィールドワーク、マーケティングリサーチ法に分けて報告する。

(1)質的分析法

質的分析法とは、主にインテンシブなインタビューや参与観察などの定型化されない方法でデータを収集し、その結果の報告に際しても数値による統計的な分析よりは、言語による記述と分析を中心にする方法といわれている[1)]。

質的分析法を集大成したLazarsfeldは、消費者調査の経験をもとに質的調査技法の理由分析の三原則をまとめた。①被調査者のあいまいさと調査者の的確さのギャップを埋めるために質問が何を意味しているかを確認する方法としての明細化specificationの原則　②質問票のパターンを情報提供者である被調査者の構造パターンに合わせる方法である分割divisionの原則

③面接者と被調査者の間で成立している暗黙の思い込みtacit assumptionの原則を忘れないことである[2]。

戦後わが国の社会学における意識調査は、行動主義や操作主義を背景にし、主に質問紙法によった社会心理学的な意識研究が主流であった。1970年代からはコンピュータによるデータ解析の開発と普及により、複雑な相関の記述や検定が可能になった。各種の世論調査はこのような大規模な質問紙法の典型例であり、母子保健分野で多用されているアンケート調査や意識調査もこの流れを汲むものである。1970年代後半から質的データと数量的データをめぐる問題提起と論争が生じ、数量的データの収集や採集そのものが枠にはめられていること、被調査者のみならず調査者もデータに拘束されていること、調査者の視線が時代や社会の中に縛られていることなどへの内省がおこなわれた[3]。

その他にも、新聞記事の量的分析や第二次世界大戦中のプロパガンダ分析から発展した内容分析はコンピュータによるテキスト分析の技法を確立している[4]。

(2)フィールドワーク

参与観察法participant observationが人類学的フィールドワークの中心的技法として確立されたのは、マリノフスキーの「西太平洋の遠洋航海者」（1922年）の出版[5]以後である。社会学においても、1920－30年代にかけて都市民族学の黄金時代といわれるシカゴ学派が活躍し、参与観察法を用いて都市の労働者や踊り子の生態を明らかにした。

その後、質問票を使用したアンケート・サーベイによる意識調査や実態調査が主流となった。しかし、操作主義が発展するにつれ、数値で表現できるものだけが客観的であり科学的であるという限定的概念definitive conceptにまで行き着き、その反動としてシカゴ学派の再評価が行なわれている[6]。

比較項目	参与観察法	アンケート調査
・現実の複雑性に対する対応	◎	×
・現実の社会と調査者の距離	◎	×
・調査事例の数	×	◎
・因果関係の明確な把握	△	△
・バイアスの排除	×	△
・調査デザインの柔軟性	◎	×

◎：優れている　△：問題がある
×：かなり問題がある

表1　参与観察法とアンケート調査の比較
（佐藤郁哉「フィールドワーク」を改変）

フィールドワークは、参与観察法やインタビューなどを通じて、当事者と部外者という二つの視点を合わせもつことにより、調査対象の実

態により迫ろうという試みだと解釈できる。従来のアンケート法との差異をみると、現実の複雑さに対する配慮や調査デザインの柔軟性などの点で優れており（表1）、複雑な現在社会における母子保健の実態の調査には適していると考えられた。

(3)マーケティングリサーチ法

マーケティングリサーチは企業や公共組織が消費者や利用者の満足を作り上げながら発展していくために、その動向やニーズを的確に把握し、その結果を企業や公共組織の行動に反映させていくための技法である。

方法論としては、量的アプローチと質的アプローチを併用し、種々の事実関係の因果関係などを追求する構造分析と、変化の方向性を分析することにより将来の予測をも行なうトレンド分析を行なう。具体的な調査方法としては、訪問調査法、電話調査法などがあるが、現在最も多用されているのがグループ・インタビュー法である[7]。

グループ・インタビュー調査の一般的なデザインは、数人の対象者を選定し、インタビューのテーマは決めておくが、あらかじめ設定された回答を用意せず、個人の自由な発言と発想に基づきインタビューが実施される。インタビュー結果の解析においても、代表的意見や問題点の抽出だけでなく、調査前には予想もしていなかった新しいコンセプトが見出だされることもある。

このグループ・インタビュー調査が母子保健事業に応用された例としては、細川らの報告がある[8]。3歳児健診を受けた子どもをもつ専業主婦に対してグループ・インタビュー法を実施し、育児に向かうときの孤立感や心細さは非常に大きく、健診に対しても指導よりも身近で共感してくれることを求めていたと報告した。このように、あらかじめ回答が用意できない潜在的な意識を調査するには非常に優れた技法であると考えられる。

文献：

1)佐藤郁哉：フィールドワーク．新曜社．1992
2) Lazarsfeld PF : Qualitative analysis ; Allyn & Bacon Inc., Boston, 1972（西田春彦、高坂健次、奥川桜豊彦訳：質的分析法．岩波書店．1984）
3)見田宗介、山本　泰、佐藤健二：日本の社会学　文化と社会意識．東京大学出版会．1985
4) Krippendorff K : Content analysis; Sage Publ., 1980（三上俊治ら訳：メッセージ分析の技法．勁草書房．1989
5)マリノフスキー、B：西太平洋の遠洋航海者（寺田和夫、増田義郎訳）中央公論社．1972
6)倉沢　進、町村敬志：都市社会学のフロンティア．日本評論社．1992
7)牛窪一省：マーケティングリサーチ入門．日本経済新聞社．1991
8)細川えみ子、井上美津子、小曽戸明子、榊原洋一、鈴木　洋、中村安秀、松山容子、宮本ふみ、山本勝美：マーケティング・リサーチ手法を用いた母子保健サービス利用者の意識調査．小児保健研究（投稿中）

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:戦後一貫して進められてきた母子保健サービス事業は、母子保健指標の改善に大きく寄与したと考えられている。しかし、住民のニーズは生活水準や住民意識に伴い変化しているが、基本となる母子保健サービスのシステムは不変である。現行の母子保健施策が変化しつづける家庭や環境に対応できているのか、現代の母子を取り巻く多様なニードに対応しきれているのか、単なる量的評価だけではなく、質的評価も重要視されなければならない。本研究では、民間機関の技法を導入することにより、母子保健事業の評価における質的評価や第三者評価を加味した評価技法モデルを提出することを目的とした。また、このような母子保健事業に関する評価技法の確立は、基本的母子保健サービスの市町村移管に際しても、必要不可欠であると考えられる。
本年度は評価技法のうち、社会学における質的分析法、フィールドワーク、マーケティングリサーチ法を概観し、母子保健事業の評価に対する応用可能性について検討した。